

貝から日本の原風景を探る

黒住耐二

ここでは私が行ってきた主に貝塚と現生の貝からみた「日本の原風景を探る試み」の一端を紹介したい。

旧石器時代～縄文時代の始め頃

日本では旧石器時代の貝塚は知られていないが、最近、約2万年前の“氷河期”の貝類が確認され始めた。本州最北端の下北半島・尻労安倍洞窟遺跡から自然堆積の陸産種（カタツムリ）が得られた。驚くことに、その多くの種が北海道に分布していないアオモリマイマイ等の現在も下北半島に生息している種であった。さらにカタツムリは広葉樹林を好み、氷河期の最も寒い時代でも、場所によっては落葉広葉樹林がかなり広がっていたと推測された。琉球列島・沖縄島のサキタリ洞遺跡からは世界最古の海産巻貝で作った釣り針や海産貝の製品が発掘され、得られたチグサガイ類等の海産種から当時の沖縄島周辺は、現在の大隅諸島から紀伊半島程度の亜熱帯海域だったことが初めてわかった。シュリマイマイ等の中大型種を含め、陸産種の組成は現在と類似しており、当時も湿度の高い照葉樹林に被われていたと考えられた。

この2つの旧石器時代遺跡から出土した主な食用動物は、下北半島ではノウサギ、沖縄島では淡水産のモクズガニとカワニナであり、“石器を付けた槍で、ナウマンゾウを狩っていた”旧石器時代人というイメージとは程遠い。少なくとも海岸に近い地域では、“今と似ている風景”だったのだろうと思っている。

その後、気温は上昇し、海進の時期に入り、サキタリ洞遺跡の1万5千年前頃の層からは、現在の奄美諸島以南に分布するホソスジイナミ等の海産種が得られ、サンゴ礁は海面には達していなかったが、海水温は現在とそれ程変わらなかったと思われる。

日本列島では、約1万年前に汽水域にすむヤマトシジミからなる日本最古の貝塚が現れる。当時、島根県・宍道湖のような汽水湖的な環境が広がっていた可能性も想定される。ただ、一方で内陸部の洞穴遺跡からは、淡水貝や内湾の泥干潟にすむ二枚貝のハイガイや外海の岩礁に生息するサザエも採集されていた可能性もあり、当時の人々が様々な環境で貝を採集していた状況が垣間見え、私は、汽水湖的な環境の広がりの可能性を除くと、西日本等の沿岸域では現在と大きく違っていなかったと思っている。

縄文海進最盛期頃（約7千～6千年前頃）

この時期には、海水面が今より2～3mも高く、気温も約2℃高かったとされることもあり、ハマグリは北海道南部まで分布を広げており、現在は有明海周辺にのみ生息しているハイガイも東北地方の貝塚から出土しており、現在よりも暖かい海域に生息する種（温暖種）も多く確認されている。

かなり大きな変化が生じていた時代と理解されるが、この時期の東京湾の貝塚では温暖種のハイガイが多い他は、ハマグリ・マガキ等が優占し、食用貝類に温暖種はほとんど認められず、九州の有明海に面した佐賀市・東名遺跡でも同様で、最近までの組成と変わらない。琉球列島でも、この地域から絶滅した世界最大の貝・オオジャコとハイガイが知られる程度で、熱帯性種で占められていた訳でない。およそ房総半島以南では貝類相や各種の生息個体数は現在と大きな変化はなく、少数の温暖種が到達しているというように理解されるものと考えている。しかし、本州東北地方から北海道では、複数の温暖種の存在から、現在と異なった海況であったと言える。日本海側各地の沖積層からは干潟に生息する消滅した小巻貝のカミノテムシロ等の種が多数知られている。当時も潮位差は現在と同様であったはずだが、日本海側では現在の単調な海岸線の多い状況とは異なった小規模な内湾が各地に存在したのではないかと想像している。

日本列島の森林は、この時期に急激に広葉樹林に変化していったと考えられており、前述の尻労安倍洞窟でも縄文時代になると本州に広く分布する種が多数認められるようになり、中部山岳の長野県・湯倉洞窟ではブナ林に多いキセルガイが出現し、植生の変化と同調している。ただ当時の県内の貝塚から抽出された陸産種からは、北総台地では草地性の種のみだったのに対し、沿岸部からは森林性の種も得られ、内陸部は乾燥、沿岸部は湿潤という違いも存在したようである。

縄文時代後半から近世（＝江戸時代）前半まで

日本列島では、縄文海進が終わり、海面が低下し、およそ現在のレベルになり、前述の日本海側を除き、約5千年間、海域の激変はなかったと考えている。一方、陸域では、当然、弥生時代の水田稲作開始から様々な場所と方法で森林伐採を中心とした農耕地拡大・植林に伴って植生景観は変化し続けていた。

琉球列島では10～12世紀に、それまでの漁撈―採集社会が、外部からの影響で穀類農耕社会へ激変した。私は、それ以前の2千年前頃に南からの水生タロイモの持ち込みを淡水産の巻貝(ヌノメカワニナ)から想定しているが、この根栽農耕は生業の中心として広がらなかったことは確実であり、風景に大きな変化を及ぼしていない。穀類農耕は森林伐採・土地改変を行い、狭い島嶼では風景も劇的に変化したものと想定される。一方で太平洋の島嶼等では人の植民・農耕開始により、鳥類の絶滅やサンゴ礁環境が激変し食用貝類組成に大きな変化の生じた例が知られるものの、琉球列島では土砂流出の影響はこの地域から種を消滅させるようなことはなく、限定的だったと考えている。

日本列島の縄文貝塚から池沼にすむオオタニシは出土するが、水田でみられるマルタニシは得られず、マルタニシは弥生時代になると列島各地から確認されることから水田稲作に伴う史前帰化と考えてきた。この想定は、日本列島のマルタニシのDNAの分析により大陸のものとは異なるとして否定された。ただ、弥生時代からマルタニシが急に食用となる現象は確実で、養殖されたのではないかと想像している。ヒメタニシも、古ければ古墳時代の、新しければ近代の大陸からの移入種(=外来種)と考えてきたが、こちらはDNAの研究でも類似した結果が出ている。

さらに、興味深いのは淡水にすむマシジミで、縄文貝塚からは確実にマシジミと同定された例はほぼなく、内陸部の遺跡でも中世までタニシ類は出土していないながら、シジミ類がほとんど得られない遺跡が大多数である。私は、淡水産のマシジミは近世末から近代に持ち込まれ、その後、本州から九州に急速に分布を広げたと考えている。20世紀末に移入種のタイワンシジミが爆発的に増加し、20年位で日本中に分布するようになったことは、同じ現象を見ている可能性も高い。

近世後半以降～高度経済成長期まで

江戸時代の終わりには西洋の科学が導入され、科学標本として貝類も残され始める。その中には、シーボルトや明治後期の平瀬與一郎等のものもある。近世末の標本には、動力船のない時代にもかかわらず水深300m位に生息する貝が含まれており、漁業混獲とは考えられず、私は蒐集用に籠等で深海の珍品を採集したのだらうと思っている。当時の漁村では底曳漁等の多様な漁業が展開され、和歌山県田辺市周辺では近世期にオキナエビス類も採集されており、貝類標本の販売カタログもあったようで、景観だけではなく、商業等としての原風景も垣間見れる。

平瀬の仕事により、日本の貝類相の概略が明らかになり、その成果から移入種の定着時期等の様々な検証

が可能となっている。例えば移入種のムラサキイガイ(ムール貝)や土着種とされるキタノムラサキイガイは国内から認められていない。一方、日本列島のアシ原にすむ種が各地で記録されており、内湾の海岸部の陸地化が読み取れる。平瀬標本には、絶滅してしまった小笠原諸島の陸産種も明治後期には多数生存しており、沖縄を含めた島嶼部でも、海から陸まで未だ良好な環境が残存していた様子がよくわかる。

高度経済成長期以降

1960年代頃の高度経済成長期から海岸の埋立て・海洋汚染・大形工場群の拡大によるハマグリ等の多数の海産種の激減、化学農薬の増加・国土開発による森林伐採の影響での淡水産・陸産種の減少が生じ、戦前までの緩やかな変化を見てきた風景が、ここで大変換してしまう。ホンビノスガイ等の移入種の増加も顕著で、20世紀末には、船底塗料中の有機スズ(いわゆる環境ホルモン)による海ほおずきの母貝・テングニシ等、多くの海産種で激減・消滅が認められている。

このように貝類も減少一途であったが、21世紀に入り、有機スズの使用規制や自然保護意識の拡大等もあり、海産種は徐々に回復してきているようだ。温暖化の影響も熱帯・亜熱帯性の種が着実に北に分布を広げているが、僅かにこれまでの組成に追加されているという程度であり、縄文海進期最盛期頃と同様と捉えている。

終わりに

21世紀初頭の今、原風景がどのような過程を経たものであるかを知ることによって、“現在の状況は、極く最近の人の行為の総体であることが理解でき、未来の子供たちに対して、今、私たちは何をなすべきかが意識されるはずである”と信じた。



熊本県/曾畑貝塚(国指定史跡) 2017年8月

(資料管理研究科)